

カント

karinomaki

嫉妬

この世でいちばん醜い感情は、嫉妬です。私は嫉妬を知らない人間ですが、カントも同様に、嫉妬を知らない人間だと思います。

カントの、「純粹理性批判」の一節の「超越論的論理学」を分析すればわかることです。嫉妬を知らない人間にしか、この章は決して書けません。

しかし、美しい嫉妬もあります。好きな相手本人に向けられる嫉妬がそうです。好きな相手によってくる同性に向けられる嫉妬が醜いと言えるのです。

なぜ、カントの「超越論的論理学」が、嫉妬を知らない人間によって書かれたものか分析してみたいと思います。

純粹認識

カントが好きな言葉に、「試金石」というものがあります。これは、何か大切なことを推し量る基準という意味ですが、純粹認識というものを量りにかけてみるとどうでしょう。

このような認識は、カントにしかあり得ない、現実に関験した人にはあり得ない認識と言えるのです。

中島義道という哲学者は、しきりにカントの哲学を「悪文だ」と言いながらカントの研究者を名乗っていますが、私から見ればとんでもないことです。だいたい、どうしてあんなに精巧に緻密につくられた純粹理性批判が悪文なのでしょう。

カントは、演繹という方法で、認識や論理をさらに純化させ、徹底的に感情の美しさを書いているだけなのに、なぜその苦闘が悪文にしか見えないのでしょうか。

感情

人は、自然や、人の心を見て、感情を持ちました。しかし、中には、中島義道さんのような、カントの美しさが悪文にしか見えない心のゆがんだ人もいるでしょう。

カントの、「理性」とは、「誤謬推論」によって伸びていく、飛行機雲です。まず、超越論的論理学によって感情を美化したあとに、誤謬推論（間違っていると仮定される理論）をバネに飛びぬいていく・・・飛びぬくと書いたのは、嫉妬という、ドロドロを、ぬいているからです。

嫉妬の醜さは、頭を破壊するほどひどいからです。

カントがいくら一人で考えぬいても頭が膿まなかったのは、女性を愛せなかったからだと思われます。仮に、「超越論的論理学」と「誤謬推論」の間に、愛や嫉妬が入っていれば、ここで、カントは気が狂ってしまったかもしれません。どんなにカントが強い人間でも、です。

なぜなら、超越論的論理学でどんなに思考を純化しても、誤謬推論という誤りにぶち当たる原因があまりにも恐ろしいからです。

私自身の話で恐縮ですが、しかも、この文章の正しさを損なうものと誤解されそうなことですが、私は精神病患者で、週一回診察を受けています。

私が40才で、再発した一つの原因が、女の嫉妬を目の当たりにしたことでした。嫉妬というものを実際に私は形として見たのです。それは、カントの哲学の塔に、原爆のようなものを落としました。正しい思考はめっちゃめっちゃになり、カテゴリー（思考の枠組み）のすきまというすきまを原爆ドームのてっぺんみたいにスカスカにして、そこに大量のドーパミンが降ってきました。黒い雨のようでした。（ドーパミンとは、精神病患者の脳に大量に発生する神経伝達物質のことです。）

嫉妬は、原爆と同じなのです。なぜ、同じ人を仲良く好きでいることができないのでしょうか。私はその女性に思いをきちんと打ち明けていたし、その人は終始優しくかったのに、心の中は私への嫉妬でドロドロだったのです。心から認め合っていると私に錯覚させておいて、実は憎まれていたのだとわかったとき、私はその人に原爆を落とされたのです。心に。心の無差別殺人です。

カント

カントは完璧な哲学者です。カントの本に無駄など一切ありません。中島義道さんのことをカントは天からどう見ているのでしょうか。想像に固くないです。こんな人の本など、天国では全て絶版にしてやりたいと思っているみたいですよ。

カントが恋愛しなかったのも、哲学に邪魔でしかなかったからです。今、哲学している私をカントが天から見ているくれても、現実に恋愛をする私に嫉妬などしないでしょう。カントは心が世界一きれいな人だから。

だから精巧な文章が書けたのですし、原爆などという無差別殺人を哲学や、感情や、思考に入れるわけにはいかなかったのです。だからカントは生前、女性嫌いだったのです。基本的に女性は嫉妬する生き物と言えますから。

紫の上

嫉妬ばかりする女の代表格が、紫式部の書いた「源氏物語」の紫の上です。しかし、彼女は悲惨な最期を迎えます。ずっと信じていた源氏に最後の最後に裏切られ、正妻の座から転げ落ちるのです。

周りのライバルの女性たちからの勝ち誇ったような同情の手紙、紫の上にとっての地獄が訪れ、最後は心労がたたって源氏を残して死んでしまいます。

しかし、源氏の本当の相手は誰だったのでしょうか。正妻の紫の上ともいえますが、源氏が生涯こだわり続けたのは、紫の上のおばである、藤壺の宮であったのです。この人はなんと源氏の継母でした。かなわぬ恋ゆえに、源氏は生き写しの紫の上を妻にしたのです。

私の病気の発端となった女性は、美しい人でした。しかし、私はその人の中に、「悲恋」しか今は見えません。なぜなら、私に嫉妬の炎を浴びせたその人は、泣き崩れて私の入院を悲しむ演技を最初はしていたのに、二回目の入院では、心がめちゃくちゃになってした私の一挙一動をことごとく私の両親に報告し、ご家族への謝りの手紙を全て自分で開封し、あろうことか、夫に持って行かせたのです。二回目の入院の時、その全ての手紙を母は持ち、先生に見せられました。私は先生に治していただき、今幸せですが、私をめちゃめちゃにしたその人にどんな未来があるのでしょうか。かわいそうな女性です。今ごろは紫の上のように死人のような貧弱な心で夫の財力にしがみついているのでしょうか。

攻撃

私がこの女性と、中島義道さんを攻撃するのは、カント哲学の敵だからです。カントは無間地獄なんて考えられなかった。だから、最後まで宗教の可能性を探り、感情、悟性、理性を精巧に組み立てた。しかし、私がカント哲学をもとに書いていた、天国への階段は、この女性が破壊しました。もし、理性が限界を持ち、カントの言うように本分を守っていれば、死後の安らぎがあった。しかし、カントの塔は破壊された。この女性がした罪はあまりにも重く、私はカントのためにこの文章を書かざるを得ないのです。

理性は破壊され、どこまでも突き抜けていき、宇宙は永遠に進化を続けることになりましたが、その代償として、無間地獄ができてしまったのです。カントがいちばん避けたかったことが、一人の心醜い女性のために、現実になってしまったのです。

網目のように広がっていく、論理の糸。これも、もしかしたら、かぎでもあり、絶望でもあるのかもしれない。理屈では人は救えず、理屈では、嫉妬も語れない。かの醜い女性が無間地獄から助かるほどの理屈などできないかもしれません。しかし、私はズタズタになり、何か月か閉じ込めになりましたが、先生に治していただき、幸せになりました。幸せとは、やはり理屈を越えたもので、いつかは人を許す命綱をつくるかもしれません。それはきっと、やはりいちばん精度の高い章であるカントの超越論的論理学を使ってしかできないのです。どんなに、心と理屈がかみあわなくても。だから、私は心で哲学する人間でいたいのです。